

J.M.ケインズについて

—「わが孫たちの経済的可能性」(1930年)—

片岡俊郎

はじめに

私は「本について」と題して、『福山大学図書館報、第5号』(2007年9月)に次のような趣旨の文章を寄稿した。

学術書を取り扱っていると、学者の著作についてひとつの区分を必要とするような気がする。

私の専門である経済学においても、一口に専門書、エッセイとして片付けるわけにはいかないからである。二十世紀の偉大な経済学者の一人であるJ.M.ケインズ(1883～1946年)は、ケインズの師を追悼する伝記「アルフレッド・マーシャル伝」(1924年、『人物評伝』1933年、所収。)において、トゥリーティス(treatise)、モノグラフ(monograph)、パンフレット(pamphlet)を使って、マーシャルの著作を整理しようとしている。

ケインズの著作は、一般的に9冊であり、他に小冊子6冊があるといわれている。ケインズが自著にトゥリーティスと名付けたのは、『確率論』(*A Treatise on Probability*, 1921)、『貨幣論』(*A Treatise on Money*, 1930)の2作である。

ケインズを世界的に有名にした著作『平和の経済的帰結』(*Economic Consequences of the Peace*, 1919)は、第1次世界大戦後のパリ講和会議において締結された平和条約に、大蔵省の首席代表として加わりながら、対独賠償要求が不当なものであると指摘するも、無視され、大蔵省首席代表を辞して、平和条約の不当を世界に訴えたものである。『条約の改正』(*A Revision of the*

Treaty, 1922) は、その続編である。

『説得評論集』(*Essays in Persuasion*, 1931)、『人物評伝』(*Essays in Biography*, 1933) は、タイトルにエッセイと冠せられている。

『貨幣改革論』(*A Tract on Monetary Reform*, 1923) には、トラクトが冠せられているが、トラクトとは、辞書に「(特に宗教上・政治上の) 小冊子、パンフレット」とある。

ケインズの上記の7著作以外の残りの2著作は、『インドの通貨と金融』(*Indian Currency and Finance*, 1913)、彼の代表作といわれる『雇用・利子および貨幣の一般理論』(*The General Theory of Employment, Interest and Money*, 1936) である。

ケインズの著作が9冊であり、小冊子が6冊であると、一般的な分類を紹介したが、出版された以上、著作、小冊子として区分するのは不適當であり、ケインズの本として一括して処理すべきではないかと思う。

なお、6冊の小冊子は、『チャーチル氏の経済的帰結』(*The Economic Consequences of Mr. Churchill*, 1925)、『ロシア管見』(*A short View of Russia*, 1925)、『自由放任の終焉』(*The End of Laissez-Faire*, 1926)、『ロイド・ジョージはそれをなしうるか』(*Can Lloyd George do It?*, 1929)、『繁栄への道』(*The Means to Prosperity*, 1933)、『戦費調達論』(*How to Pay for the War*, 1940) である。

ケインズの言うトゥリーティスは、大部な体系的専門書、モノグラフは、専門書、それ以外の書は、ケインズの場合、小冊子を含め、啓発書と理解すべきではないかと思う。

ケインズが、マーシャルの著作の分類で示したトゥリーティス、モノグラフ、パンフレットの区分によれば、ケインズの貨幣論の専門書(モノグラフ)は『インドの通貨と金融』、『雇用・利子および貨幣の一般理論』の2冊である。

ケインズが、「アルフレッド・マーシャル伝」において、自身、貨幣論学者として精進すると宣言しているのを踏まえ、時代的背景である国際金本位制

期(1900～1914年)、再建国際金本位制期(1925～1931年)、金本位制離脱後(1931～1946年)と結びつけて、私は、ケインズを、初期ケインズ(1883～1925年)、中期ケインズ(1925～1931年)、後期ケインズ(1931～1946年)と整理してきた。

『貨幣論』以外の大部な体系的専門書である他の1冊、『確率論』は、ケインズが取り組み、放棄した研究をまとめたものであると考えれば、ケインズを貨幣論学者として位置づけ、初期ケインズ、中期ケインズ、後期ケインズの代表作として、『インドの通貨と金融』(1913年)、『貨幣論』(1930年)、『雇用・利子および貨幣の一般理論』(1936年)を取り上げ、ケインズ貨幣論の展開を追究することは肝要である。なお、本稿で取り扱う、ケインズが未来を見通したエッセイ「わが孫たちの経済的可能性」(“Economic Possibilities for Our Grandchildren”, 1930)は、啓発書として整理した『説得評論集』(1931年)に収録されている。

I

J.M.ケインズは、1930年10月11日号、10月18日号の2回にわたって雑誌『ネイション・アンド・アシナム』に「わが孫たちの経済的可能性」を発表する。二部から構成されている故、二つに分けて、要約して紹介すれば、次の通りである。

ケインズは、「わが孫たちの経済的可能性」で1930年時点での経済的悲観論を問題にし、今後10年間を含め、ケインズの考え方を整理することを目的としているとする。

ケインズは、母国イギリスを例に経済的悲観論は、現実に基づかない誤解から生じていると結論づける。

ケインズは、今後10年間を念頭に置き、経済的悲観論は二つの誤りに基づき、一つは急激な変革以外に事態を改善できないと説く革命家と、他の一

つは、われわれの創意工夫の必要性を認識せず、事態はそのまま放置するしかなく、なんらかの行動をおこしても、改善の方向へは向かわないであろうと考える保守反動家によって説かれたものであるとする。

ケインズは、二つの悲観論の誤りは、今後10年間で明確にされるであろうことを指摘した上で、ケインズの意図は、現在や近い将来を問題にするのではなく、今後100年間に経済生活の水準がどのように変化するかを予測することであるとし、言い換えれば「わが孫たちの経済的可能性」を論ずることであるとする。

ケインズは、将来を予測するためには、過去の歴史はあまり参考にならないことを示し、文明の進歩に必要なものは、近年の旺盛な技術革新と、巨額な資本蓄積であるとする。

ケインズは、歴史を振り返り、文明の急激な進歩がなかったのは、創意工夫の継続的必要性が今ほどなく、人類は既存の資源、既存の技術に基づきながら、文明に対応してきたからであるとする。

ケインズは、有史以前にまで目を向け、文明の急激な進歩が存在したであろうことを想像しつつ、それは一時的、非連続的であったが故、ここで問題にする必要はないと付言する。

ケインズは、文明を政治、経済、軍事、技術、文化と理解した上で、文明の進歩は、経済によってもたらされたものであり、前記、資本蓄積の重要性を歴史的に^{さかのぼ}遡って確認する。

ケインズは、資本蓄積に目を向け、資本蓄積が、複利の力によることを、具体的な数字をあげつつ説明し、人類が資本蓄積を開始して以来の過去250年間を、歴史のなかで重視しなければならないとする。

ケインズは、以上の歴史認識から、複利の力を含めイギリスの金融的ノウハウの優越性を強調し、文明の進歩にイギリスが果たしてきた役割の大きさを説く。

ケインズは、資本蓄積に基づいた科学技術の偉大なる発展についても言及する。

ケインズは、科学技術の進歩によってもたらされた人口増加に着目し、増加した人口を科学技術の進歩はまかなっただけではなく、人々をより豊かにしたことを、具体的数字で示し、今後の人口増加についても若干の感想をつけ加える。

ケインズは、資本蓄積を資本設備の増加と結びつけ、一産業にとどまらず各産業にまで広げ、今後の物的豊かさの可能性を示唆する。

ケインズは、科学技術の急激な進歩は、ここ10年間のことであり、第2次産業である鉱業、製造業、第3次産業である運輸業から開始された科学技術の進歩は、第1次産業である農業にまで及ぶであろうと予測している。

ケインズは、科学技術の進歩のもたらす欠陥として、失業を問題にし、科学技術の先進国で生じた失業の世界的波及の問題解決には、少し時間を必要とすると説く。

ケインズは、科学技術の進歩から生ずる失業を「技術的失業」と名付け、失業は、不適応によるものであり、一時的な局面で生じる問題であるが故に、解決は必ず可能であるとし、人類が経済的問題を解決しつつあることの証左であるとの認識を示している。人類が、経済的問題を解決した暁には、はるかに豊かな生活水準を、一部の国だけではなく、世界の各国は享受できるであろうと予測している。

II

ケインズは、100年後に、われわれが平均して現在よりも8倍だけの良い経済生活ができると仮定して話を進める。

ケインズは、人間の欲望を無限としながらも、経済的には、絶対的な必要と相対的な必要と区別して論じることができるとする。上記の8倍だけの良

い経済生活が確保されるのは、絶対的必要を指し、相対的必要については、ここでは論じないとしている。

ケインズは、ここで、結論を示すことによって、読者の想像力を喚起しようとしている。

ケインズの結論は、経済問題が人類の恒久的な問題でないことを読者に訴え、重大な戦争と顕著な人口増加がないと仮定すれば、経済問題は100年以内に解決されるか、あるいは少なくとも解決のめどが見つかるであろうとしている。

ケインズは、読者が以上の結論に疑念を抱くのは、過去の歴史に遡り、経済問題が生存のための闘争により解決され、人類全体の問題として、即ち平和を前提として解決できる問題であると考えてこなかったからであるとする。

ケインズは、従来、経済問題解決のためには、人間の性質がゆがんだ形で発揮されてきたとし、経済問題が解決されれば、人間本来の性質が^{じゅうぜん}十全に展開できる社会が構築されるであろうと説いている。

ケインズは、経済問題解決の意味を以上のように考えるが故に、経済問題の解決には今後20年ではならず、今後100年で考えなければならないとする。

ケインズは、経済生活が豊かになった当時のイギリス、アメリカの富裕者階級に目を向け、特に^{はんざつ}婦人たちが煩雑な家事から解放されたものの、家事の中で見出す楽しみ以上のものを他に見つけることができず、その結果ストレスが増大しつつあると説いている。

ケインズは、日々生活に追われる人々にとっては、余暇はあこがれであり、楽しみであるとするが、実際、余暇が獲得されれば、余暇の使い方に悩む話へと展開する。

ケインズは、人間が直面する問題が、経済問題でなくなった場合、人類最大の問題は、余暇を、賢明で快適で裕福な生活のためにどのように活用するかであるとする。

ケインズは、人々が豊かな経済生活を獲得した時に、世界から尊敬される国民は、生活手段そのものをより完璧なまでに洗練し、生活手段のために自らを売り渡すことなく、活力を維持し、豊かな生活を続けられる方法を日々見出している国民であろうとしている。

ケインズは、人々が招来する豊かな生活の過し方に疑念を抱くことは、もっともとしながらも、努力は結果を求めるためにするものではないと考える人々にとっては、問題の解決は可能であろうとしている。

ケインズは、以上のような考え方に立てば、例として触れた富裕者階級とは区別された、豊かな生活を獲得した人々が、まったく異なった生活設計を立てることによって、余暇の問題は解決されるであろうとしている。

ケインズは、人間の性質に目を向け、人間の性質の改善にも努力は注がなければならないとする。

ケインズは、人間の性質の改善の前提が、資本蓄積であることを確認した上で、貨幣に対する真の見方を確立することが、人間が、今までの社会的慣習および経済的慣行から自由になる道であるとしている。

ケインズは、人間の強烈な目的意識に注目し、目的意識が社会的慣習および経済的慣行に基づくものと、それから自由であるものとを区別し、後者こそが豊かな社会で最も必要なものであるとしている。

ケインズは、強烈な目的意識と結びつけ、手段よりも目的を高く評価し、効用よりも善を選ぶことの重要性を指摘した上で、豊かな社会で尊敬される人は、一日を高潔で上手に過ごすことを教えてくれ、物事の中に直接喜びを見出し、汗して働くことも紡ぐこともしない、野の百合のような人であるとしている。

ケインズは、現実を踏まえ、経済問題の解決のために、貨幣愛に憑かれた人々にも一定の評価を与えることを人々に訴えている。

ケインズは、経済的目的が新しい社会において第一義的でなくなったにし

でも、経済的目的で行動する人々の存在を認めるべきであろうとしている。

ケインズは、豊かな社会実現のための四つの条件を次のように示す。第1は、人口の調整能力、第2は戦争および内乱の回避、第3は科学技術を使いこなす人間性、第4は資本蓄積であるとし、第4の資本蓄積は、他の3条件が満たされれば、おのずと達成できるとしている。

ケインズは、新しい社会を迎えるに際し、今からその準備をしておくことは、必要であろうとしている。

ケインズは、自身に目を向け、経済学者が社会の前面で活躍する時代から、歯科医師と同様に経済学者が目立たないところでその専門性を発揮することが必要とされる時代の到来を期待して、「わが孫たちの経済的可能性」の結びとしている。

III

ケインズは「わが孫たちの経済的可能性」において、豊かな社会が到来し、余暇が生じ、そのようななかでも、金銭欲を追求しない人々の存在を、余暇の過ごし方がわからない金銭欲とは無関係な雑役婦の悩みとして、金銭欲を追求する人々の代表として、無限の金銭欲を追求する仕立屋の行動として、挿話で示した。本稿では、ケインズに倣い、K氏を登場させ、日常生活の過ごし方から喜びを見出しているK氏と、金銭欲から自由になったK氏をとりまく人々との関係を、具体的に示す中から、ケインズの問いに一つの答えを見出してみたいと思う。

K氏は、広島県福山市で生活している。日本のプロ野球球団、中日ドラゴンズの熱心なファンでもある。K氏は、中日ドラゴンズがかつてセントラル・リーグで優勝し、パシフィック・リーグの勝者と日本シリーズを争った時に、切符を手に入れることが出来なくて、レギュラー・シーズンに一度も、球場で観戦しなかったことを反省し、それ以後、少なくとも名古屋ドームへ一度、

広島球場へ一度、足を運ぶことを自らに命じ、実行している。

2007年度、中日ドラゴンズは、セ・リーグの優勝を逃すものの、クライマックス・シリーズで勝ち上がり、パ・リーグの覇者、北海道日本ハムファイターズと日本シリーズを戦うことになった。遑つての話から始める。

2007年9月5日、名古屋ドームへ出向き、中日、巨人戦を観戦し、10月1日、広島球場へ中日、広島戦を見に出かけた。日本シリーズには、11月1日、名古屋ドームで、中日ドラゴンズが日本一になったのを見届けた。2007年9月5日から、11月1日までのK氏の日常生活を、国産が少なくなり、特に今年は不作といわれる、日本の秋の食文化に欠かせない食材、松茸の話を変え、語ることにしよう。

2007年9月5日、名古屋を営業区域とする教え子のS君と、名古屋名物の「ひつまぶし」を名古屋の名料亭の百貨店松坂屋店で食した。セットの中に「松茸と青菜の浸し」が付いていたので、K氏は従業員に、国産であるかどうかを問うた。「何をいまさら」という感じで、「外国産です」という答えが返ってきた。

2007年9月8日、京都の同志社大学で学会があり、夕食を京都の「祇園、重兵衛」で、教え子三人と会食した。「松茸の土びん蒸し」が出てきたので、早速K氏は、従業員に同じ問いを發した。従業員の答えである。「K先生に、当店で二セ物を出すということは、ありません。」

2007年10月1日、広島県の役人である教え子のG君と野球観戦を途中で切り上げ、広島の名料亭の出店である行きつけの、流川にある「小丹吾」で食事をした。女主人、Mさんの言である。「今年は、良い松茸がなかなか手に入りません。もちろん広島産ですが、焼き松茸にして、K先生に食べてもらうのは、いかがかと思い、天ぷらにしました。」

2007年10月6日、大阪で教え子たちとの研究会があり、会終了後、K氏ひいきの雑炊で有名な大阪の「大美」で懇親会が持たれた。女主人の言である。

「焼松茸を召し上がって下さい。もちろん国産ですから、安心してお召し上がりいただけたと思います。心をこめてお出ししました。」

日本シリーズが、中日ドラゴンズと北海道日本ハムファイターズで争われることになったが、飛行機に一度も乗ったことがない K 氏にとっては、札幌ドームでの 1・2 戦は、あきらめざるを得なかった。したがって、第 3 戦から第 5 戦までの名古屋ドームでの観戦しか、選択の可能性はなかった。

日本シリーズが始まる直前の話である。スポーツ新聞を子会社として持つ新聞社の幹部である教え子の M 君に、切符を依頼した。条件は、観戦に同行して欲しいとだけ付け加えた。しばらくして、「名古屋での初戦(第 3 戦)は、むずかしいです。第 5 戦であれば、何とか手配が出来ます。」とのことであった。そこで、K 氏は、伊勢名物「赤福」が「むきあん」「むきたま」と分離し、いったん店頭に出した物を、もう一度再利用して店頭に出していたために、騒ぎとなっていたことを踏まえ、日本シリーズが、第 4 戦で決着した場合、第 5 戦の切符は、賞味期限の切れた「むきあん・むきたま」と同様であるから、第 5 戦を押さえた上で、第 3 戦を何とか手に入れて欲しいと、K 氏は M 君に再度依頼した。

札幌ドームでの 2 戦は、1 勝 1 敗で、名古屋ドームへ戦いの場が移る時点で、M 君から電話があった。「第 3 戦は、何とか取れましたが、一塁側ではなく、日本ハムの側である三塁側で、しかも 5 階席です。どうされますか?」。K 氏は、「とりあえず、第 3 戦の切符を郵送してもらいたい。あわせて、第 5 戦の切符(一塁側の 2 階席)も郵送して欲しい」と返事した。

2007 年度日本シリーズを戦う中日ドラゴンズと北海道日本ハムファイターズは、昨年度に引き続きの戦いであり、昨年度、圧倒的優勢を伝えられながらも、1 勝 4 敗で敗れた中日ドラゴンズにとっては、絶対に負けられない試合となった。昨年に引き続き指揮をとる中日ドラゴンズの落合博満監督以下、全員一丸となって勝ちに行く姿勢が一ファンである K 氏にも伝わってきた。

第3戦の切符と第5戦の切符を手にしたK氏は、日ごろからK氏の動向に注目しているK氏の奥さんに、次のように語って、K氏は決意を示した。

「今年度の中日ドラゴンズは、セ・リーグで巨人について2位であり、クライマックスシリーズで3位の阪神、1位の巨人を破ったとはいえ、まだ本物かどうか、わからない。中日が日本シリーズに敗れた場合、パ・リーグ1位の日本ハムは、パ・リーグ1位として、パ・リーグのチャンピオン・フラッグが札幌ドームにはためくが、名古屋ドームには、日本シリーズを戦っても何の証も残らない。したがって、何としても、今回は勝ちに行かなければならない。その場合、ファンの一人として、何をなすべきか、と考えた場合、日本ハム側である3塁側での観戦は、今年度に関して言えば、日本シリーズの雰囲気満足するだけになりかねず、ファンとしての役割を果たしたとはいえない。したがって、中日ドラゴンズ側の1塁側の観戦である、第5戦に出かけることにする。しかし、第3戦の切符が手元にある以上、テレポート(身体移動)を活用し、まず、一度、3塁側から1塁側に席を移し、再度テレポートして、福山の自宅書斎で、切符を握り締め、テレビ観戦に活かすことにしたい。」

日本シリーズ第3戦は、9対1、第4戦は4対2で、中日が勝利し、第5戦の観戦に、K氏は福山から名古屋へ出向いた。前記、決意を、松茸との関係で説けば、松茸が本物であるか、本物でないか、あるいは、国産か外国産かは、この場合、日本シリーズに勝利して初めてわかることなのである。3塁側での観戦は、仮に松茸が本物であったとしても、雰囲気を楽しむ「土びん蒸し」であり、ネット裏であればせいぜい「松茸の天ぷら」である、1塁側での観戦は本物で、悔いを残さない「焼松茸」を選択したことになる。さしずめ、切符を手配し、同行したM君は、「焼松茸」に欠かせない「スタヂ」ということになる。

第5戦は、緊迫した試合となり、1対0で中日ドラゴンズが勝利し、53年ぶりに、中日ドラゴンズの監督、コーチ、選手、ファンともども日本一の美

酒に酔った。松茸に例えた観戦は、結果として、松茸は本物であり、しかもスダチをかけて最高の「焼松茸」を名古屋ドームで味わう経験をしたことになる。K氏の日常生活は、野球観戦からも伺えるように、K氏を取り巻く金銭欲から自由になった人々との関係の中で、極めて楽しく充実した一例であることを示したことになるであろう。

IV

豊かな社会を迎えるに際し、われわれが豊かな社会における生活技術を身につけて準備しておく必要があると、ケインズは述べるが、その場合は、準備の場所は、日本においては大学ではないかと思う。

広島県福山市に1975(昭和50)年、福山大学が創設される。創立者でもある宮地茂学長は、1999(平成11)年4月6日、福山大学入学式において「真の自由を問い、人生観を体得しよう」との学長告辞を述べている。創立メンバーの一人である私が『福山大学回想三十年誌』(平成17年5月15日)に、「宮地茂先生『平成11年度入学式、学長告辞』」と題して寄稿していることもあり、『学報』に掲載された学長の告辞全文を示した上で、前記の問いに答えを出してみたい。

「ご来賓並びにご父母各位のご臨席の下、第25回福山大学入学式を挙げるに当たり、一言ご挨拶申し上げます。

新入生諸君、ご入学おめでとう。ようこそ私たちの福山大学へ入学して来られました。私たち教職員、在學生は諸君の入学を心から祝し、歓迎いたします。

さて、言うまでもないことですが、大学は高校の単なる延長ではありません。高校では、主として教師から教えられることを勉強し、あるいは、大学入試に必要な科目を重点的に学んで来られたことと思います。

高校における教育の主体は教師であって、諸君は専ら^{もっぱら}教えられる側でした。

教師が教えることをただ学んできたわけではありますが、大学は違います。主体は学生です。教員の講義やゼミに触発され、自分で考え、判断していくのです。

大学で教員が『教育する』ということは、学生各自の中にある物を引き出していくことです。

学生が『学ぶ』ということは、教員の教えることをただ暗記するのではなく、諸君が未来を築いていく基礎を培^{つちか}っていくことです。

そうして、その間に諸君は誠実さを胸に刻み、真理を究め、道理を体得していくのです。

望むらくは、諸君はこれからの将来を冷静に見つめ、夢と希望を持って前進していただきたい。

大学はまだ未知の世界でしょうが、周囲には必ず良き師、良き友が大勢いると信じます。混迷の世相や、もどかしい国際情勢とは異なって、学園には何ものにも干渉されない雰囲気があります。

一人の人間として成長し、また学園生活を楽しく送るために必要な最小限の規則がありますが、そのほかは自由です。

これからの諸君は、自分の専門分野を極めるほか、例えば立派な人間とはどんな人のことか、道理とはどういうことか、道義とは何かを静かに考え、さらに、教員や学友との交際を通じて切磋琢磨し、人として生きていくための人生観、世界観について、互いに体得していただきたい。

以上、諸君の人生における一人の先輩として、私の所見の一端について述べましたが、今日からは不思議な縁で諸君と師弟、同窓の関係を持つことになりました。

どうか今後、福山大学生としての誇りと自覚を持って精進され、また楽しい大学生活を送られることを期待して私の挨拶といたします。

平成 11 年 4 月 6 日

福山大学学長 宮地 茂(『福山大学学報』第80号、平成11年4月6日)。

宮地茂学長は、入学生を歓迎するのは、教員、職員、在學生であるとして、大学は教員、職員、学生から構成されていることを確認して、話を進めている。

まず、大学は今までの高校とは違い、また進学の際、選択可能であった専門学校でもないことを、教える側と教えられる側の一方通行を排除する考え方で示す。

入学式場という場所柄、主体は新入生とし、教員との関係を述べるが、大学が教員、職員、学生の三位一体から構成されている以上、教員が主体である高校、専門学校と、大学との違いを述べ、一方通行を排除するといいながらも、教員、職員、在學生の、新入生に対するリーダーシップの必要性を説く。

大学で、教員が「教育する」ために、学生には誠実さを求め、教員は真理を説くだけでなく、真理に至る過程、即ち考える道筋の重要性を示し、学生の中に隠れている才能を引き出す努力をしなければならないとする。

大学で、学生が「学ぶ」ということは、大学で、教員から教えられることを暗記し、試験で答案を書くことに満足することなく、未来を築くために、日常生活を含め、常に緊張関係を持つ生活をすることによって、学内外における継続的な学習活動を行うことの重要性を説く。

したがって、大学生としての生活は、真理を究めるだけではなく、道理を体得していくことができるとする。

大学は、夢と希望を与える場所ではないとして、夢と希望を具体的に達成する方法を示す。

福山大学には、良き師、即ち良き教員と職員、良き友、即ち良き先輩、良き同輩がいることを、学長として確信した上で、タテマエとウソで成り立つ現実の社会(混迷の世相)と戦争のない平和な社会を築けない国際情勢にもどかしさを感じ(もどかしい国際情勢)、両者の解決即ちホンネでマコトを語れる社会と戦争のない平和な社会を築くことこそが、夢の実現であり、希望

の達成であるとする。大学に自由を必要とするのは、そのためであり、そのためであるが故に、大学における自由の大切さを学長自身が説くのであるとしている。

大学における自由は、全ての教員、職員、学生に、常にホンネでマコトを語ることを保障し、そのことが保障されていることによって、各人が、自由の中での個人としての自立を身に着けることができ、日々、人間的成長を遂げることが可能にする。したがって、世界の中で個人の果たす役割の重要性を確認することもできるのであるとする。世界は、一人ひとりの個人から構成されているからである。

大学においては、専門分野の学習だけで満足せず、時には、義理、人情にも目を向け、世間から立派な人と言われている人々に対して敬意を払い、身近な教員、職員、学生との交流を通じて、前記の夢と希望を体得してほしいと結んでいる。

入学式における創立者で、学長でもある宮地茂学長告辞から、ホンネでマコトを語れる社会、戦争のない平和な社会を取り出し、豊かな社会を迎えるにあたり、一人ひとりが何を目指さなければならないかを、学んだことになる。

私は、ウソとウラギリについて、『福山大学図書館報、第5号』(2007年9月)に次のように記している。

「フランシス・フォード・ Coppola の映画『ゴッドファーザー』(1972年)は、うら社会のうそとうらぎりがテーマである。

主人公がゴッドファーザーといわれる理由は、法に触れるが、確実に儲(もう)かる麻薬を捨て、一般の人々がリスクが多く、手を出せない正規の事業で巨万の富を得、寡黙でうそを控え、相手を信頼することによって、うらぎりを防いだことによる。

大学は、おもての社会、まこと(真理)と信頼で成り立っている。うそとまこと(真理)の間にある隠し事をなくし、うらぎりと信頼の間にある従順は、

大学人、一人ひとりの人間的成長によって、面従腹背とは区別される、個々独立した人間と人間との関係としての信頼にまで高める必要がある。」

以上、『福山大学学報』、『福山大学図書館報』を見るかぎり、福山大学は、豊かな社会を迎えた時に、どのように生きなければならないかの方向を、明確に示しているように思える。

おわりに

ケインズは、「わが孫たちの経済的可能性」で、「重大な戦争と顕著な人口増加がないと仮定すれば、経済問題は100年以内に解決されるか、あるいは少なくとも解決のめどがつくであろう」、したがって、「経済問題が――将来を見通すかぎり――人類の恒久的な問題ではないことを意味する」としている。

「かくて人間の創造以来はじめて、人間は真に恒久的な問題――経済上の切迫した心配からの解放をいかに利用するのか、科学と複利によって獲得される余暇を賢明で快適で裕福な生活のためにどのように使えばよいか、という問題に直面するであろう。」とする。

「豊かな時代が到来したときに、その豊かさを享受することができるのは、活力を維持することができて、生活術そのものをより完璧なものに洗練し、生活手段のために自らを売り渡すことがないような国民であろう。」とし、「しかし余暇の時代、豊かな時代を、不安感を抱くことなしに期待できるというような国もなければ、国民もないと、私は考えている。」としている。

「われわれはこの時間、この一日の高潔で上手な過ごし方を教示してくれることができる人、物事の中に直接の喜びを見出すことのできる人、汗して働くことも紡ぐこともしない野の百合のような人を、尊敬するようになる。」とする。

「しかし何よりもまず、経済問題の重要度を過大に評価したり、経済問題で

仮定されているいろいろな必要のために、もっと大きく、より持続的な重要性を持った他の諸問題を犠牲にしたりしてはならない。それは、歯科医術と同じように、専門家たちの問題であるべきなのだ。経済学者が歯科医たちと同じ位置にとどまって、控えめで有能な人とみなされるようになることができたとすれば、それはすばらしいことであろうか！」と結んでいる。

ケインズを整理区分して、初期ケインズ、中期ケインズ、後期ケインズとする方法を示したが、ケインズの「わが孫たちの経済的可能性」を執筆したのは、中期ケインズの時期にあたる。ケインズは、「アルフレッド・マーシャル伝」(1924年)において、師マーシャルを偲ぶ中で、自身は「貨幣経済学者としての途を歩む決意を示している。中期の大部な体系的専門書である『貨幣論』は、その成果である。ケインズは、『繁栄への道』(1933年)の中で、「貨幣経済学者は、「政治経済学」者でなければならないとして、後期ケインズの専門書である代表作『雇用・利子および貨幣の一般理論』を完成する。ケインズは、弟子R.F.ハロッドに宛てた手紙(1938. 7.4, 1938. 7.16)で、「政治経済学」者で自身は満足していないことを示し、「人間学としての経済学者でなければならないとしている。そのことは、回想録「若き日の信条」(1938年)を読めば、ケインズの苦悩を具体的に把握することができる。したがって、1930年時点で、歯科医と比較される経済学者は、中期ケインズの「貨幣論学」者としての言なのである。

次に、「野の百合のような人」とは、私的生活における高潔な生活術の達人を指すことはいうまでもないであろう。

さらに、豊かな時代が到来したときに、世界をリードする国は、軍事大国でもなく、単なる経済大国でもないことを示している。世界で尊敬される国は、政治、経済、軍事、技術、文化に優れた国であり、政治、経済、軍事、技術は、その国の文化に裏付けられて意味を持つのである。その場合、文化は、精神文化を指し、学術、芸術、宗教、教育等なのである。国家が一人ひ

通りの国民によって構成されている以上、優れた政治家、実業家、軍人、技術者、文化人のリーダーシップを必要とするというまでもないが、前記「野の百合のような人」が国民の私的側面を示すとすれば、公的側面においても、一人ひとりの国民に求められているものは、それぞれの職場においての高度な専門性なのである。一人ひとりの国民が公私両面においてその責を果たし、一部の政治家、実業家、軍人、技術者、文化人に国を委ねないことが肝要なのである。

さらにまた、余暇の過し方からすれば、日常生活において、仕事と余暇を区別するのではなく、日々、緊張感を持って社会に接することである。ホンネでマコトを語ることは、公私両面においてであり、マコトを信頼に結びつける高潔な日常生活の達人を、国民一人ひとりが目指すために、「余暇」は活用されなければならないのである。

ケインズの「わが孫たちの経済的可能性」の結論、「経済問題が――将来を見通すかぎり――人類の恒久的な問題ではないことを意味する」は、以上の考察から、狭義の経済問題となり、晩年のケインズが目指した「人間学としての経済学(モラルエコノミクス)」からすれば、ケインズの言う狭義の経済問題が解決したとしても、広義の経済学の問題は残り、広義の経済学の問題解決は、われわれの手に委ねられたことになる。

＜なお、ケインズの著作からの引用は、『ケインズ全集』(イギリス王立経済学会編、東洋経済新報社、1977年～)の翻訳によった。＞